

球磨川下流域の土木治水史について

= 目次 =

■ 八代の町の歴史（城下町）

八代城について

■ 球磨川の舟運について

天下の急流筏流し

球磨川の開削

木材の集積地八代

■ 下流域の土木治水史について

安定的な用水の確保（杭瀬から遙拝堰へ）

八代の町を洪水から防御（萩原堤）

萩原土手町

前川の造成

新川と敷石

■ 藩政時代の土木治水技術を考える

球磨川下流域の洪水防御のしくみ

■ 河港の歴史について

お飯屋の港

梅檀の津

徳測の津

蛇籠港

八代城関係年表（中世～明治）

年号	西暦	できごと	
建武元年	1334	名和義高、八代荘の地頭職に任じられる。	
建武2年	1335	名和氏一族の内河義貞が下向する。	
建武3年	1336	一色範氏が内河の城を攻める。	
正平3年	1348	阿蘇家文書下「五條頼元書状写」に八代城の存在を確認できる。	
長祿3年	1459	名和氏が李氏朝鮮と通航、交易を行う。	
文明16年	1484	相良為統が名和氏の八代城（三ヶ所城）を攻略する。	
明応8年	1499	菊池能運の攻撃により相良為統が人吉城へ引き揚げ、名和顯忠が城主に復活。	
1500年	永正元年	1504	2月、相良長毎らの攻撃により名和氏は宇土に追放され、再び相良氏が八代城に入る。
	天文2年	1533	9月、徳測の津に商館を設置。
	天文3年	1534	閏1月16日から鷹ヶ峯城の築城に着手。
	天文23年	1554	2月23日相良晴広、市木丸を造船、7月5日に渡航する。
	天正9年	1581	相良義陽が響ヶ原で戦死、島津氏が八代を支配する。
	天正15年	1587	豊臣秀吉の九州平定により島津氏は八代を放棄。秀吉は佐々成政を肥後の領主とする。
	天正16年	1588	閏5月、小西行長が肥後半国の領主となる。この後、麦島城を築き、行長の重臣小西美作行重（木戸作左衛門）が城主となる。
1600年	文禄元年	1592	薩摩の東郷甚右衛門、谷口五郎左衛門、谷口因果之助ら小西美作の留守中に八代城を攻める。（梅北の乱）
	慶長5年	1600	関ヶ原の役、小西氏が滅亡し加藤清正が肥後五十四万石の領主となる。
	慶長16年	1611	6月24日、加藤清正死去。
	慶長17年	1612	6月27日、幕府より八代城代（麦島城）を加藤正方に命じられる。水俣、宇土、矢部の三ヶ城が破却される。
	元和元年	1615	一國一城の令が出され佐敷城を破却。肥後では熊本城と八代麦島城が残される。
	元和5年	1619	3月17日、大地震により麦島城が崩壊。
	元和8年	1622	加藤忠廣は松江村の徳測付近に幕府より許可を得、加藤正方に命じて9月より築城に着手。
	寛永9年	1632	2月、八代城（松江城）が竣工する。
		1632	6月、加藤家が改易になり忠廣は出羽庄内に配流、正方は浪人の身となる。
	寛永10年	1633	12月25日、藩主細川忠利の父、三斎（忠興）が八代城に入る。
	寛永11年	1634	本丸、二の丸の作事が幕府より許可される。
	寛永17年	1640	八代城の新作事所に池が掘られる。
			大天守と小天守の間の塀、欄干橋の修理の他、北の丸に数寄屋が建築される。
	正保2年	1645	本丸北側の石垣が大雨のため崩れ、10月9日に修復工事竣工。
			5月、八代城代細川立孝、江戸で死去。
	正保3年	1646	12月、細川三斎（忠興）が八代で死去。
	正保4年	1647	5月、松井佐渡興長が八代城代に任命される。
	寛文12年	1672	8月13日、松井興長が八代に入城。
	延宝元年	1673	2月19日、落雷により大天守、小天守の他諸櫓閣が焼失。
	延宝6年	1678	小天守他の櫓、御殿等が再建される。但し、大天守は再建せず。
	元禄元年	1688	1月28日、城内火災。
	享保11年	1726	濱の茶屋創建。
1700年			本丸より巽方石垣1ヶ所、二の丸侍屋敷東の方堀端石垣1ヶ所孕み出し修復出願。
	宝暦7年	1757	二の丸に傳習堂、教衛場を設置。
	宝暦8年	1758	本丸より卯の方堀下石垣1ヶ所、同卯の方石垣1ヶ所、同申の方石垣1ヶ所孕み出し修復を、同寅卯辰巳午未の方折廻し水堀1ヶ所、同丑寅の方水堀1ヶ所の渡瀬を出願。
	明和7年	1770	12月29日、城内火災。
	寛政5年	1793	本丸より未申の方水堀1ヶ所、同戌亥の方水堀1ヶ所、同子丑の方水堀1ヶ所渡瀬を出願。
	寛政9年	1797	10月2日、本丸奥御殿より火、小天守および本丸御殿を全焼。
	寛政10年	1798	本丸御殿、小天守の再建及び小天守下石垣の修復を出願。
	寛政11年	1799	本丸より卯の方堀下石垣1ヶ所、同未の方石垣1ヶ所、同酉の方石垣1ヶ所孕み出し修復と、同丑寅の方水堀1ヶ所、卯辰の方水堀1ヶ所の渡瀬を出願。
1800年	寛政12年	1800	本丸御殿作事、8月上棟。
	享和元年	1801	3月28日、本丸御殿移徙。
	嘉永2年	1849	11月、本丸より丑寅の方石垣1ヶ所破壊し修復を出願。
	嘉永7年	1854	本丸より子丑の方石垣3ヶ所、同午の方石垣2ヶ所、同申酉の方石垣5ヶ所石垣孕み出し修復を、同卯の方水堀1ヶ所、辰巳の方水堀1ヶ所、同子丑の方水堀1ヶ所の渡瀬を出願。
	明治3年	1870	八代城廃城。

加藤清正
加藤忠広

八代城主
加藤正方

八代城主
細川三斎

八代城主
松井興長

以降
松井家

■八代の町の歴史(城下町)

八代の町は弥生時代から平安時代にかけては豪族が支配していましたが、今から670年前の西暦1330年には名和氏が八代地方を治め、現在の遙拝堰右岸付近に山城を築き、城下町を形成していました。その後、天正(てんしょう)16年(1588年)、宇土・益城・八代・天草の領主となったキリシタン大名・小西行長(こにしゆきなが)が、名和(なわ)氏時代の古麓城(ふるふもとじょう)を廃して、重臣の小西行重(こにしゆきしげ・末郷【すえさと】)に命じて麦島の地に城を築かせた。当時麦島は中世以来の貿易港の徳渕(とくぶち)の津と球磨川(くまがわ)に挟まれた水運に適した場所であり、球磨川と前川を外堀として活用していました。

慶長(けいちょう)5年(1600年)の関ヶ原の戦い後、八代は加藤清正(かとうきよまさ)の治めるところとなり、麦島城も加藤氏の支城(しじょう)となりました。支城となった後、麦島城の改修が行なわれました。また、慶長8年には麦島城下でキリスト教徒の殉教(じゅんきょう)があり、元和(げんな)元年(1615年)、大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡すると「一国一城令」が出されたが、肥後国の加藤領は例外として熊本城と麦島城の二城が残されました。麦島城は同5年3月の地震で倒壊したが、幕府の許可を得て翌6年の2月に現在の松江城町で城の再建が始まり、同8年に現在の八代城(松江城)が完成しています。



出典:八代市公式ホームページ

麦島城跡地



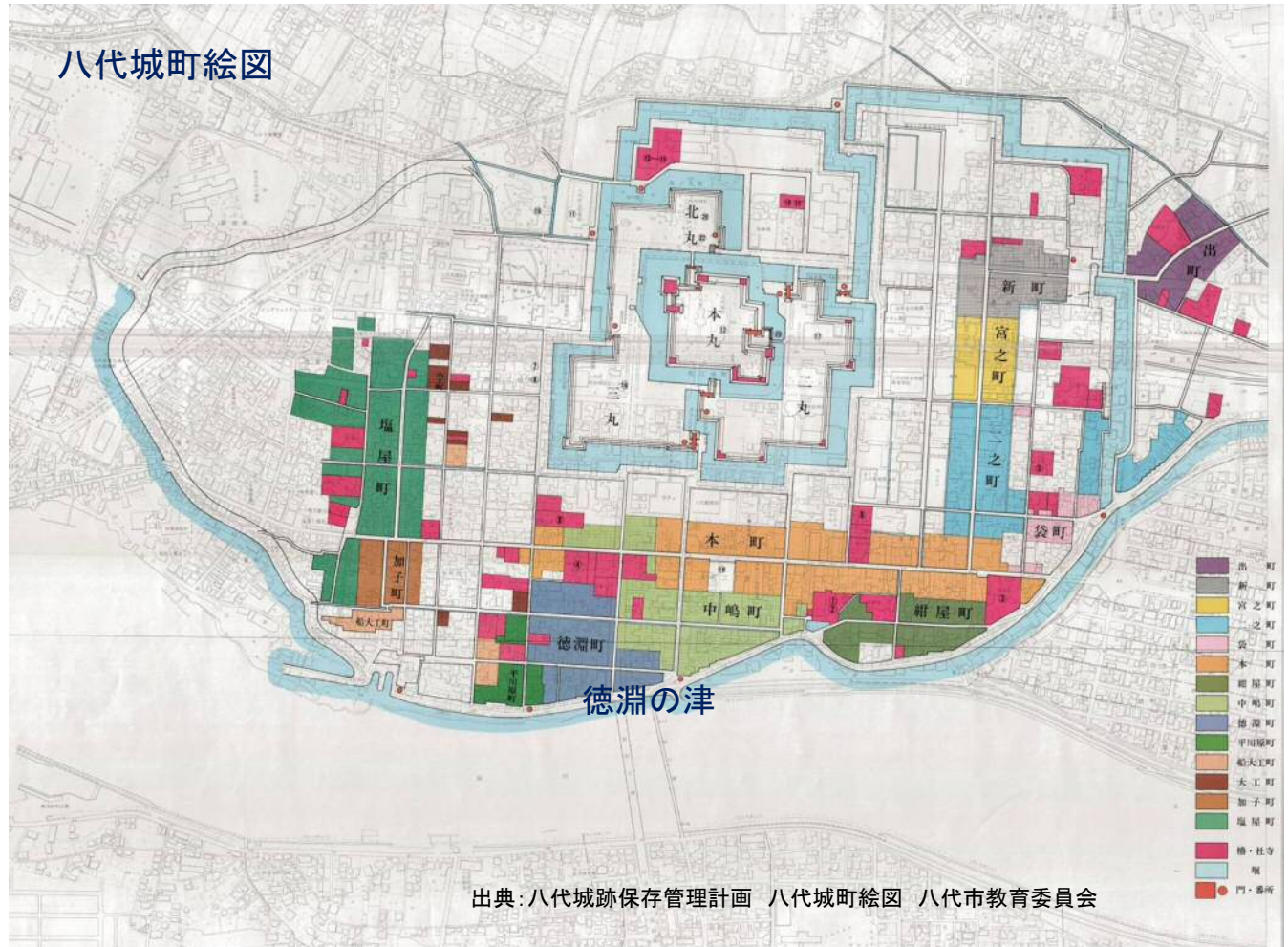
八代城跡(松江城)

古麓城下町

八代城について

元和元年（1615年）に一国一城令が出され、肥後国は熊本城と麦島城の一国二城体制が特別に認められています。しかし、同5年の大地震によって、麦島城は崩壊した。熊本藩主の加藤忠広（かとうただひろ）は幕府の許可を得て、城代（じょうだい）の加藤正方（かとうまさかた）に命じて徳淵（とくぶち）の津（つ）北側に城を再建し、同8年（1622年）に竣工（しゅんこう）しました。これが、現在の八代城で、明治維新まで肥後国の一国二城体制が続くこととなりました。寛永（かんえい）9年（1632年）、加藤氏が改易（かいえき）されると、豊前（ぶぜん）小倉藩主の細川忠利（ほそかわただとし）が熊本藩主となり、忠利の父・細川忠興（ほそかわただおき＝三斎【さんさい】）と四男立孝（たつたか）が八代城に入城した。忠興は八代城の整備を行い、北の丸の隠居所（いんきょじょ）には名木臥龍梅（がりょうばい）を植え、茶庭（ちやてい）を設けた。正保（しょうほう）2年（1645年）5月に立孝は若くして没し、忠興も同年12月に没してしまう。藩主細川光尚（みつなお）は、八代城を細川家の筆頭家老でかつ將軍直臣（じきしん）の身分も持つ松井興長（まついおきな）に預けた。これ以後、二代寄之（よりゆき）・三代直之（なおゆき）と代々松井氏が八代城を治め、八代の発展に尽くしました。

また、八代城は石灰岩できており、別名白鷺城とも呼ばれ、八代市の中心的な歴史公園として親しまれています。



■球磨川の舟運について

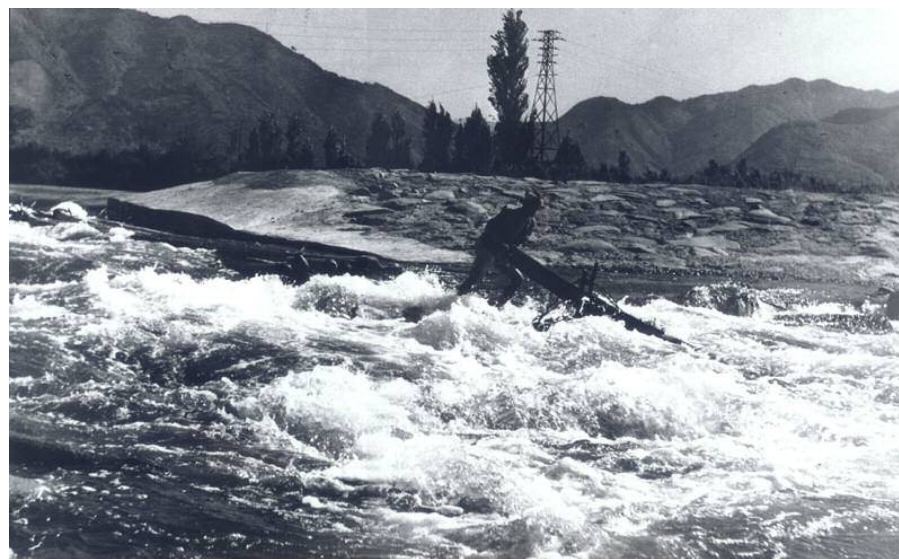
天下の急流筏流し

『球磨郡誌』の「筏流し」の項は、古来から相当に行われ、球磨郡及八代郡の山林より伐り出す材木は古来から甚だ少ないのであった。殊に、最近時は時局の波に乗って筏流しが激増した。次に「天下の急流筏流し」の項には、天下の急流球磨川を流す筏は、最近時局の波に乗って飛ぶ様に売れる。材木を川上から八代へ向け運搬するに、球磨郡一勝地・白石・瀬戸石・八代郡上松求麻村鎌瀬・葉木方面より7～8里の間を、筏に組んで一日数十艘を景気よく流している。浅い処は棹でさし、深い処は櫓板であやつり乍ら、流す筏はよけれども雪や氷にとざされてあすは八代に着き兼ねると鼻唄交りでこの急流球磨川の物凄い瀬もなんのそのと、さっと来る大瀬の水煙りを、サット身に被り乍ら、見るものにヒヤリとさせるが、当の御本尊は鼻唄歌って下っているが、実に鮮かなもの、筏組の話に依ると、「高尾戸の瀬、遥拝の瀬が、一番危険ですが之も馴るれば平気なものです……が平常減水の際は、葉木から八代迄4里の間を5時間掛るが、増水の際は2時間で着く」と言っていた。降雨の時など蓑笠姿で棹さす姿は実に一幅の絵巻で之も天下の名所球磨川の一風景であろう。と記されている。球磨川の雨の中の筏流しの景観はまるで墨絵のような風景である。

出典：球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



昭和13年頃の球磨川、萩原橋より上流を望む



球磨川の開削

寛文4年（1664）、相良藩の御用商人林藤左衛門正盛は個人の努力によって河口八代から初めて人吉城下に船舶を通した球磨川開削の恩人である。爾来、八代から人吉町へ汽車が開通した明治41年（1908）6月1日まで実に260余年間、この川船は実に重要な交通機関の一つであった。林家の系図によれば、その祖先は片岡氏、丹波国篠山（ささやま）の住人で承応年中に人吉に来ているようである。初代は九郎右衛門正算（まさかず）・2代が藤左衛門正盛である。

正盛、41歳の厄落しのため万民の利便を図ろうとこの勇猛心を起しての大事業であった。

『日本土木史』には「藤左衛門は私財をなげうって、寛文2年、藩主相良頼（より）喬（たか）の許可を得神仏に祈願をこめ、4カ年を費やして寛文5年に竣工せるものなり。」と記されている。

この難工事を成功させたエピソードがある。球磨郡球磨村の大瀬にあった亀石が堅くて舟行を妨げるのでどうにかならないかと思案していた。ある日狐が出てきたので、この瀬の石を割る仕方はないかとたのんだ。ところがその夜、青井神社の稲荷様のお告があった。

藤左衛門の夢枕に一匹の狐が現われ「石の上で火を焚くとよく割れる。」と告げ、それに従って岩の上で火をたき、3日間のうちに亀石を取り除くことができた。それによりこの場所を亀割と言うようになり、正盛宅に稲荷社を勧請して長く信仰するようになった。この工法は火で岩を熱して水で冷却するという、石の膨張、収縮を応用した技法である。

これにより寛文4年（1664）舟が通行できるようになったので、舟の通行鑑札に亀の字を焼印して水主毎に渡し、また舟にも亀の焼印をおして免許された。そして通行の船造りがさっそく行われた。寛文5年、川舟造り方が八代御假屋の舟大工、山城氏におおせくだされ、川舟をつくり、求麻川にうかべたのが、求麻川舟往来のはじめである。その時、高むれの弥三左衛門、萩の甚右衛門、渡りの源右衛門等が相談して、はじめは神瀬多武の木より一升内（一勝地）大坂間村まで、試に登らせ無事に着舟した。それより一勝地内の石割りをし、三ヶ浦、渡の石をとり除いて、神瀬と渡との間の水路を正盛が開さくしたもので、八代から神瀬まではすでに往来がなされていた。林正盛の難工事の完成により球磨郡の物資の流通に多大な影響を及ぼした。藩主頼喬は正盛の労をねぎらい、九日町別当役外舟運に関する諸問屋の権利が与えられ、多くの下賜品が与えられた。

出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川

亀割り石

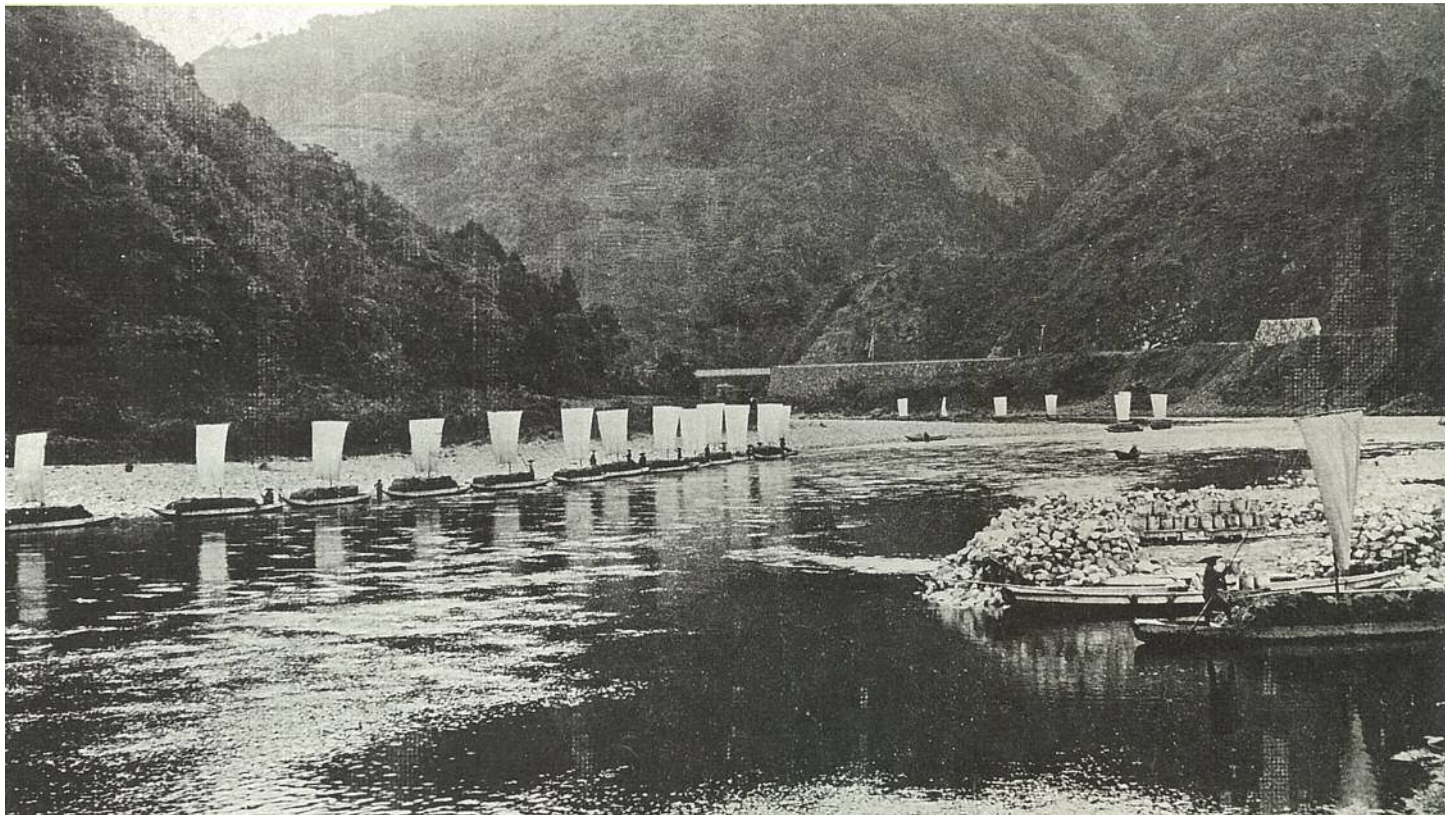
むかしむかし、人吉の町に、林正盛というさむらいがおりました。あるとき、正盛は、球磨川に水路をひらくことを思いました。そのころの球磨川は、流れが早いゆえに、いくつもの大石が川のまん中にこしをおろして、舟でくることができなかったのです。「舟で川をくだれるようにするには、大石をとりのぞかなくては」と考えた正盛は、石工たちに命じて、のみで大石をくだかせました。工事はどんなにかどりましたが、大瀬下（今の球磨郡球磨村大瀬）まで来ると、川のまん中に亀石という大石があり、大きいうえにかたいので、石工のみをうけつけません。困りはてた正盛が、ある日、もの思いにふけてみると、一匹のキツネに出会いました。正盛は思わず、「キツネよ、なんとかあの亀石をとりのぞく知恵を貸してくれまいか」と頼んでいました。その夜のことで、正盛の夢に神さまが現われ、「のみではだめだ。あの岩の上にかれ木を山と積んで火をつけよ」と言って消えました。目をさました正盛が、いわれたようにすると、岩に大きなひびが入ったのです。それから数日後、割れた亀石はとりのぞかれ、川は静かに流れるようになりました。正盛は、その後、自分の屋敷にいなり神社をたてて感謝し、人々はやがて、この亀石のあったあたりを、「亀割り」と呼ぶようになったそうです。



舟運が開けなかった時は、米などの物資は神瀬まで陸路を運搬していた。特に米の運搬賃は諸郷負担であったので、水路の開通で諸郷の資出減となり大変喜ばれた。毎年、球磨川下りの川開きの3月1日には、人吉城内にある頒徳碑の前で碑前祭が開かれ、一年間の川下りの安全祈願がなされる。人吉市南願成寺町岩清水の高台にある正盛の墓所では、命日の11月12日に子孫や観光関係者が集まり、しめやかに墓前祭がとり行われている。尚、大正13年（1924）2月11日、紀元節の佳日、林正盛に従五位下の贈位があり、人吉城内に「林正盛翁頒徳碑」ができた。相良頼喬（長武）は、寛文8年（1668）2月下旬、参勤のため、始めて祓川（青井前）から乗船、主水は高ムレ弥三左衛門、萩の甚右衛門、藤本の源助、箆（えびら）瀬（せ）の甚左衛門、渡利の「源右衛門」であった。時に頼喬28歳となり、これまでは陸路佐敷からの乗船であったようである。元禄元年（1688）の参勤交代にも青井阿蘇神社の前より（祓川）乗船し八代へ下っている。八代の港は球磨川の南川口にあった御飯屋（おかりや）港であった。

この開さくされた球磨川舟運は、米良（めら）氏が参勤交代で人吉から屋形船で八代まで川下りをしており、相良領ではすでに鎌倉時代に「河梶取」「所梶取」の語からみられるように早くから舟運が行われていたようである。この利便は球磨一群のみならず芦北・八代2郡はもとより、宮崎、鹿児島に往来する旅人にも影響した。

出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川



木材の集散地八代

球磨川に荒瀬ダムや瀬戸石ダム・遥拝堰などが戦後できるまでは、球磨川中流より筏で木材が運ばれたものだった。球磨川は相良氏や米良氏が江戸時代に参勤交代ルートとしたことはすでにのべた通りであるが、平田舟による物資の流通・木材や竹材の筏流しなど重要な水上交通路となっていた。この筏流しも沿岸の鉄道や道路交通の整備とともにすたれた。

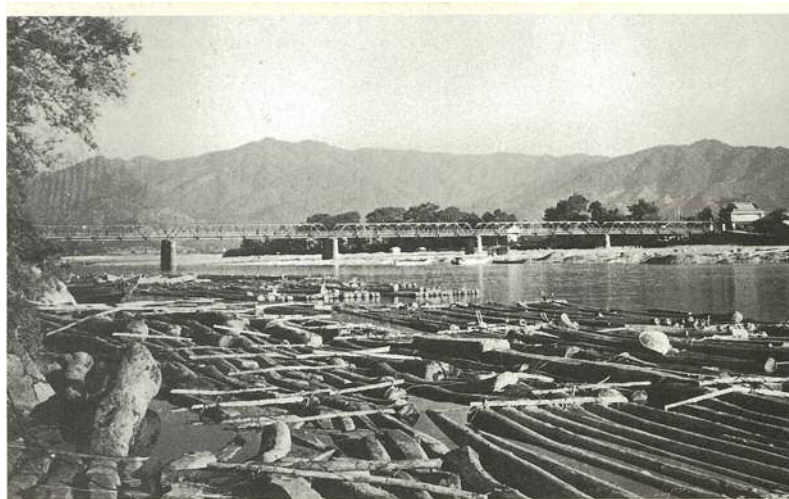
『人吉藩林制沿革史』（1922）には「球磨川は日々筏の下らざる時なかりしと云ふ」と記されている。筏流しは球磨郡球磨村の神瀬を中継基地として流下し、八代市の萩原堤から前川橋付近にかけてが筏の到着場であり、一般には舟場と言われていた。人吉市の球磨川下り発船場の対岸付近が木山の渚と呼ばれ、筏に組んでいた場所といわれ、水の手橋と大橋の間が筏口の瀬と呼ばれていた。

昭和28年（1953）8月11日付の『熊本日日新聞』によれば、八代市は球磨川の流筏による木材集散地で年間3億円の木材を売り上げていたことが記されている。筏は幅3メートル位でまず地組みとして前に7本、後に5本位大きな木を組み、乗せ木として前に10本、後に7～8本のやや小さな木を乗せた。木材は3.6石が1平方メートルであり、大体約4平方メートルが筏1そう分であったと言われる。筏流しは一勝地から八代まで一日の行程で、深水川口や百済来、更に上流の那良口あたりから午後2時ごろ流れ着くように時間を見計らってきたようである。筏が着くとそれを解体して大八車で製材所へ運ぶ仕事があり、その仕事をする人たちを河端仲仕または木材仲仕（水揚仲仕）と呼んだ。萩原から前川橋にかけて仲仕小屋（大八車を置く所）や茶小屋（仲仕の休息所）があった。昭和29年（1954）頃、26人の河端仲仕が八代市で活躍していた。昭和27年

（1952）頃、球磨村一勝地から八代市萩原までの運賃は筏流しでは石当たり45円に対し、トラックでは130円に当たり85円も高かった、

八代市の明治後期から大正初期には木材商や木材仲買人及び木材仲仕、和船問屋などがあった。大正7年（1918）、八代町には造船工場が6あり、大正6年（1917）の工産物として漁船を除く船舶33隻あった。球磨川の筏流しなどについては『球磨川の水運について』牧野洋一（熊本短大論集第32巻第2号〔通巻第66号〕）に詳述されている。その中の昭和28年（1953）には木材関係として製材業22、木工業12、家具工業3があった。製材業は球磨川沿いが多く萩原町5、蛇籠町4、徳湊町3、舟大工町3、松江町2などであった。と記されている。要するに八代と人吉間に鉄道が開通し、瀬戸石ダム（1958年）、荒瀬ダム（1954年）の完成により、八代と人吉間の舟運や筏流しは完全に途絶えてしまった。

出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川



昭和11年頃の前川、筏で運ばれた材木が並ぶ。



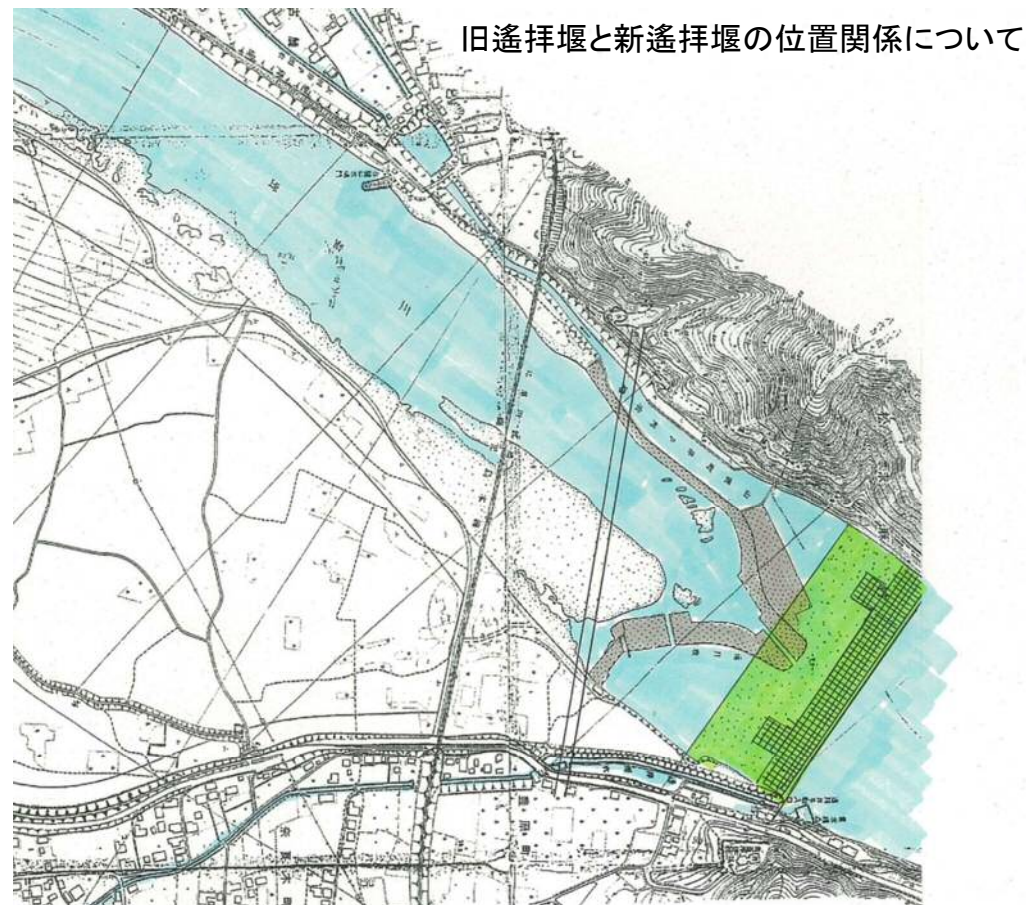
現在（平成25年1月撮影）

■下流域の土木治水史について

安定的な用水の確保（杭瀬から遙拝堰へ）

球磨洲の河口に近い遙拝堰は中世杭瀬と呼んでいた。名和・相良氏時代に川水をかんがい用水として取り入れるため、川中に杭を打ちこんで水流をせきとめる設備であった。この杭瀬は川の中を中心に八字形の石堰に改造したのが加藤氏時代で堰の両側には大きな溝渠を掘って水を通じ、その取入口に二重の樋門を造って洪水時に備えた。名和顕（あき）興（おき）が館（やかた）を杭瀬に構えたという記録に見え、南北朝の後半に杭瀬という名の用水堰があって八代平野の水田をかんがいた。八代荘は名和氏の穀倉であり、高田郷・太田郷の郷村制成立とともに、川北に太田井手・川南に奈良木井手ができた。そして加藤時代になって大形の自然石や割り石を積んだ八字堰が構築された。この遙拝堰もあい続く球磨川の氾濫で崩れたが、そのつど修繕と補強が施され、江戸末から明治・大正・昭和になって昭和22年から23年にかけて農林省の直営となり、近代工法によった遙拝堰が完成した。昭和38年7月、大洪水被害復旧費6千万円といういたいたしい経験にかんがみ、堰のすぐ上方に農・工業用水を豊富にとり入れることのできる新堰が農林省の国営事業でつくられた。新遙拝頭首工は国営八代平野土地改良事業と熊本県工業用水道事業との共同工事として昭和44年3月完成した。

。 出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川



旧遙拝堰と新遙拝堰の位置関係について



現在の遙拝堰



旧遙拝堰

八代の町を洪水から防御（萩原堤）

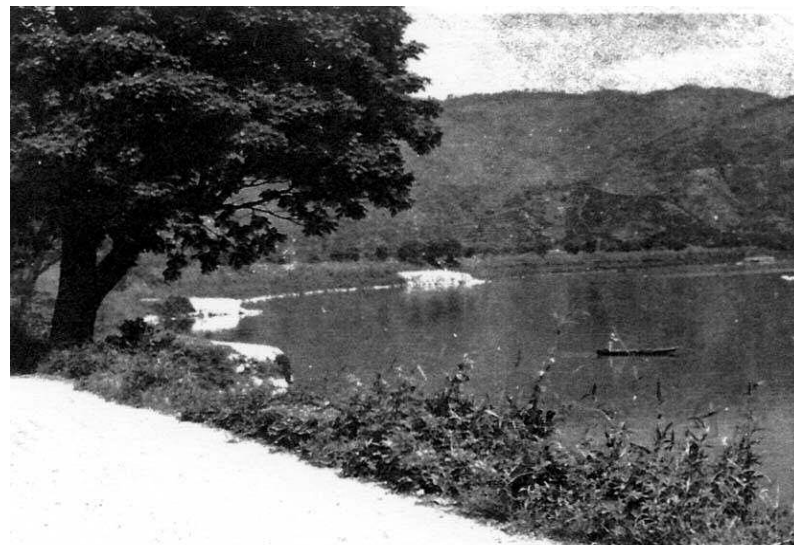
球磨川口北側堤防は、加藤右(う)馬(まの)允(じょう)正方(まさたか)が、元和5年（1619）から2年半を費して八代城を築城の際に、同時に完成させた事業の一つである。この築堤は古麓町の山麓から工事をはじめて前川堤を通過して松浜軒裏手に終る総延長6190メートルこの堤防を補強させるために松を植えさせた。水防と国防の二大使命を目的としており、萩原橋附近から上流の堤防を特に萩原堤と呼んでいる。

江戸中期に著作された『肥後国誌』によれば、「萩原堤は、古麓村の山ぎわ林(りく)鹿(ろく)庵(あん)の辺より、萩原村・横手村・松江村のうちを過ぎ、八代城下の総曲輪(なる)枡形(ますがた)・徳淵・平河原町・塩屋塩浜をまわり、松浜軒の辺にいたり、その間2里ばかりの長堤、並木の松原なり。」、長堤は、古麓村林鹿庵の前より海口にいたること、およそ2673間、歴代これを築きて、もって熊川北辺の水害を禦ぐ。加藤正方修してこれを大にし、一名松堤とい、云云」とも記されている。この堤防は、別名、長堤・松堤・松塘とも呼ばれ、清正の築いたものを、正方が改修し、7箇所「はね」をとりつけた半環状の堤防とした。宝暦5年（1755）6月9日の大洪水については『銀台遺事』の記録があるが、昨年の資料集にくわしく記述しているので省きたい。この堤防は、松が内側に植えられ、外側には桜並木があつて、よく調和していたが、松並木は終戦直後、松食虫にやられて枯れた。桜と榎(はぜ)が松に一段と風情を加え道行く人の心を慰めたものだった。

出典：球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



明治時代の萩原堤

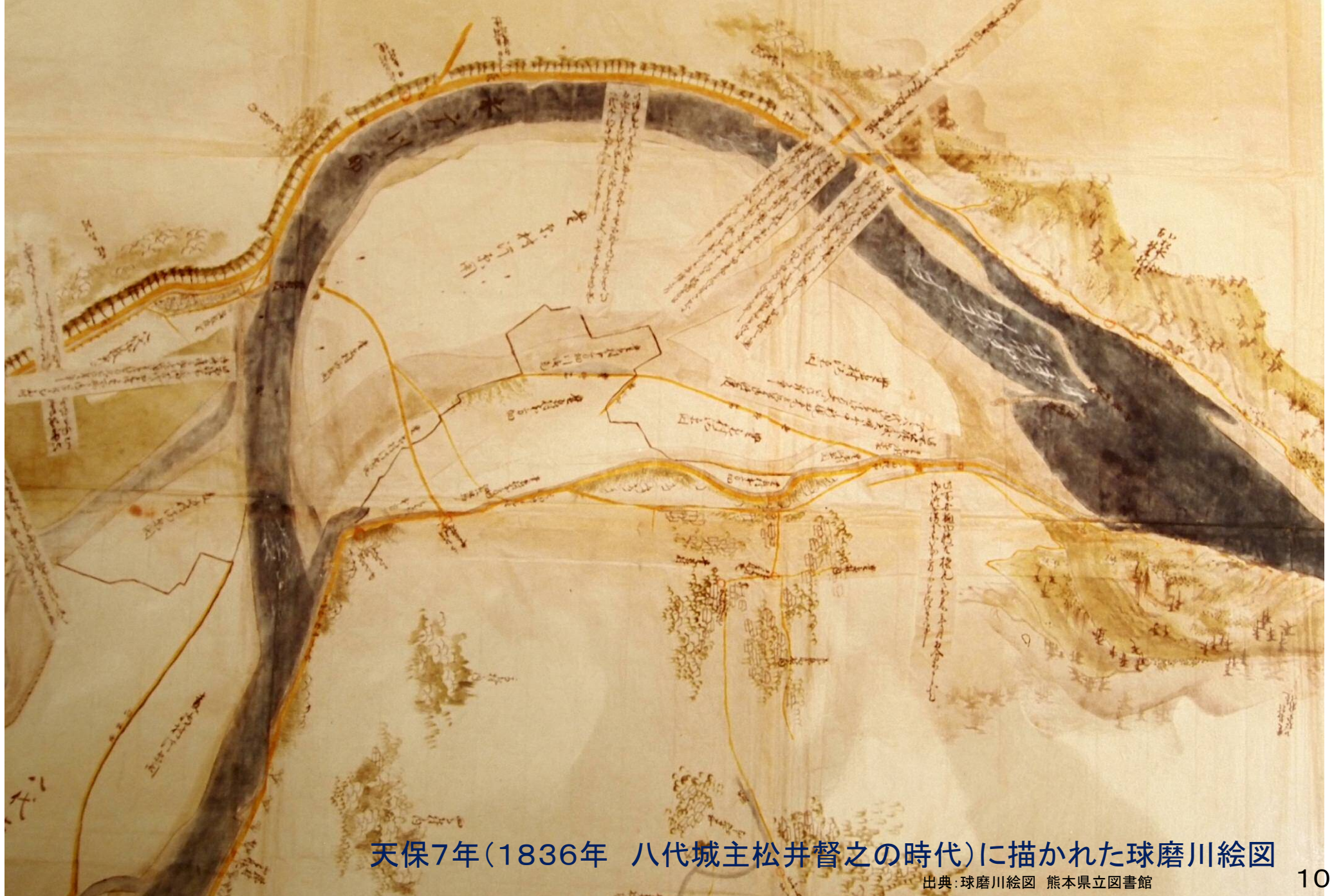


昭和30年代頃



昭和20年代頃

萩原地区拡大図



天保7年(1836年 八代城主松井督之の時代)に描かれた球磨川絵図

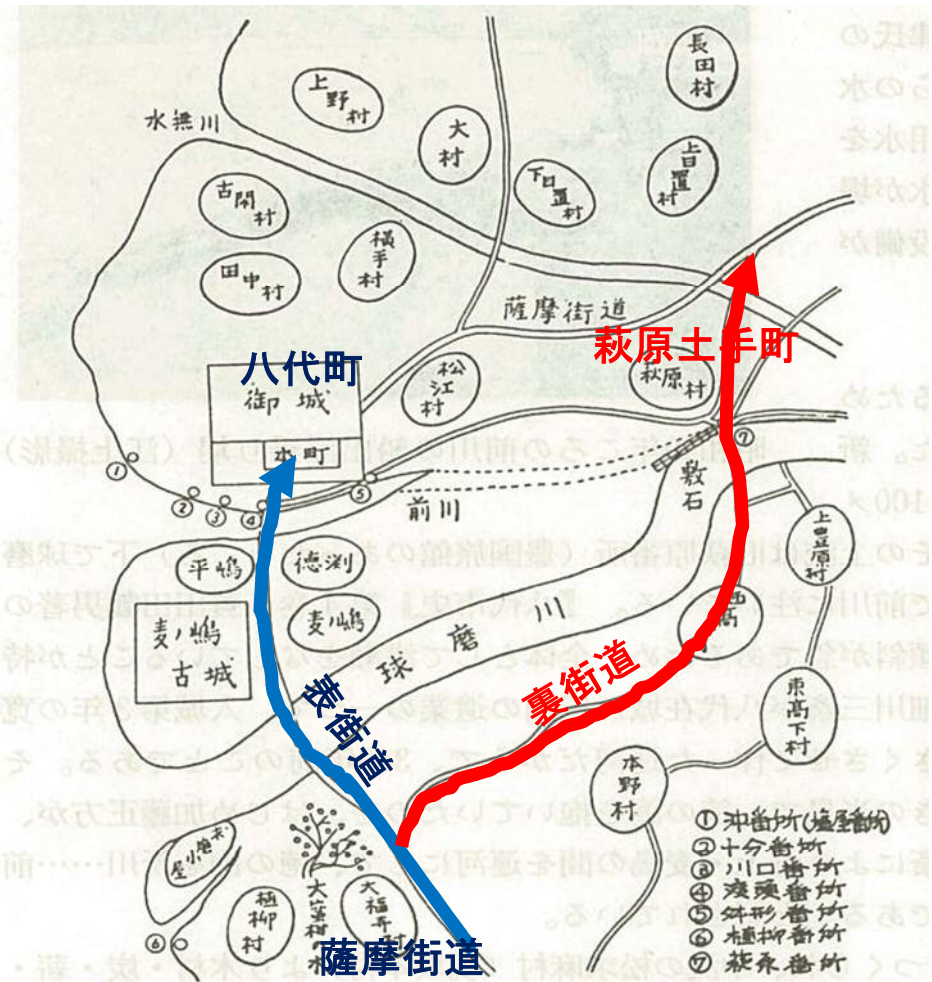
出典: 球磨川絵図 熊本県立図書館

萩原土手町

萩原土手町については、『球磨川舟運と在町的集落の形成』—八代郡高田手永萩原土手町について—、蓑田勝彦（熊本史学、第50号記念特集号・昭和52年12月）にくわしく紹介されている。萩原土手町は『球磨川筋絵図』（熊本県立図書館蔵）に出ており、現在の八代市萩原一丁目の一部で、球磨川の旧堤防ぞいに、萩原御番所や萩原の渡しを中核として成立した町で、天保7年（1836）の上記絵図に、萩原番所のすぐ下流側の土手外に「萩原村之内土手町」と記されている。土手町と呼ばれる以前は、石王村の呼称であったが球磨川舟運と陸上交通の要衝になっていた。元禄2年（1689）萩原番所がおかれてから、その周囲にしだいに集落が形成されていった。『先例略記』の中の「萩原土手町居住願」に宝暦3年（1753）年、萩原村土手筋に、「出見世都合17軒、但小屋掛共」とあり、宝暦5年（1755）の大洪水以前は、萩原天神社から萩原番所にかけての堤防上に形成されていたものと考えられる。その大洪水でおし流されたあと萩原番所より下流側の堤防外（土手外）の地に集落ができた。

この土手町形成によって今まで直接八代町に入っていた上流各地から舟運による産物・商品の大部分が、途中のこの萩原土手町に荷あげされて城下町の町人のところへこなくなった。また近在の人びとや薩摩街道の通行者たちが八代町までいかずに、土手町で用件をすませてしまう姿が如実に見られるようになった。このため八代町の商人たちが藩に訴えて萩原土手町が繁栄することにストップをかけ解体を藩に訴えた。このため藩も「商札面外之商売」に停止を命じ、文政5年（1822）6月、それに従わなかった15名の者を処罰したために衰退した。

出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川



昭和30年ころの萩原橋付近

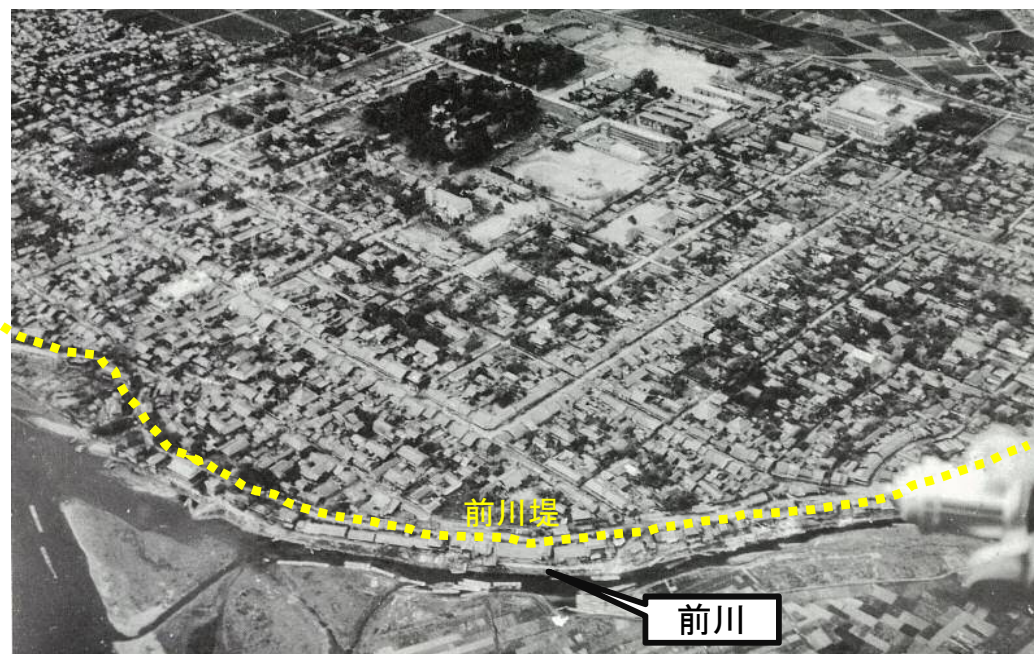
前川の造成

前川は古来はぜ塘と前川堤の前面の川を言うのであってはぜ塘はふくまない。『大日本地名辞書』によれば、求麻河の一
支川にして、八代市街の南を流るるものなり、長一里、其海口を八代の錨地と為すと記されている。前川堤は八代城下町南
側の外郭であってもともと徳の渚入り江の海岸を守るための小規模の潮塘であった。その潮塘が正方築城の時から前川堤と
呼ぶようになった。この場所は古代から中世にかけて徳渚の津として大船出入の良港であった。特に名和教(のり)信(のぶ)
や相良義(よし)滋(しげ)らが大船の泊地として、朝鮮に使節を送り大陸と貿易を行った場所で、義(よし)滋(しげ)のころに
は中島館を設けて南方琉球方面にも発展した。

天文8年(1539)市(いち)来(き)丸(まる)という渡明船の進水式をこの徳の渚で行い、渡明船は渡唐船と呼ばれ中国方面と
の貿易船の港として発展した。前川は加藤正方の築城とともに徳渚の上流を掘って前川とし、この堤防筋に数か所船つき場
を設け海上交通の基点とした。寛永11年(1634)細川三斎が加藤氏よりひきつぎ舟や筏を通す目的で別に大きな新川を開さ
くし、城下町に着船させるための運河をつくった。

前川開さくの目的は、城のまもり国防としての役割で球磨川を外(そと)濠(ほり)とされ島津氏の侵入を防ぐ意義をもち、
城郭と村むらの水防を目的とした。また八代城の濠に用水を引くことが考えられており、前川の水が堤防の下をくぐって総
濠の中にはいる設備が施されていたものと考えられる。

出典:球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



昭和13年頃の八代市街地



現在の八代市街地

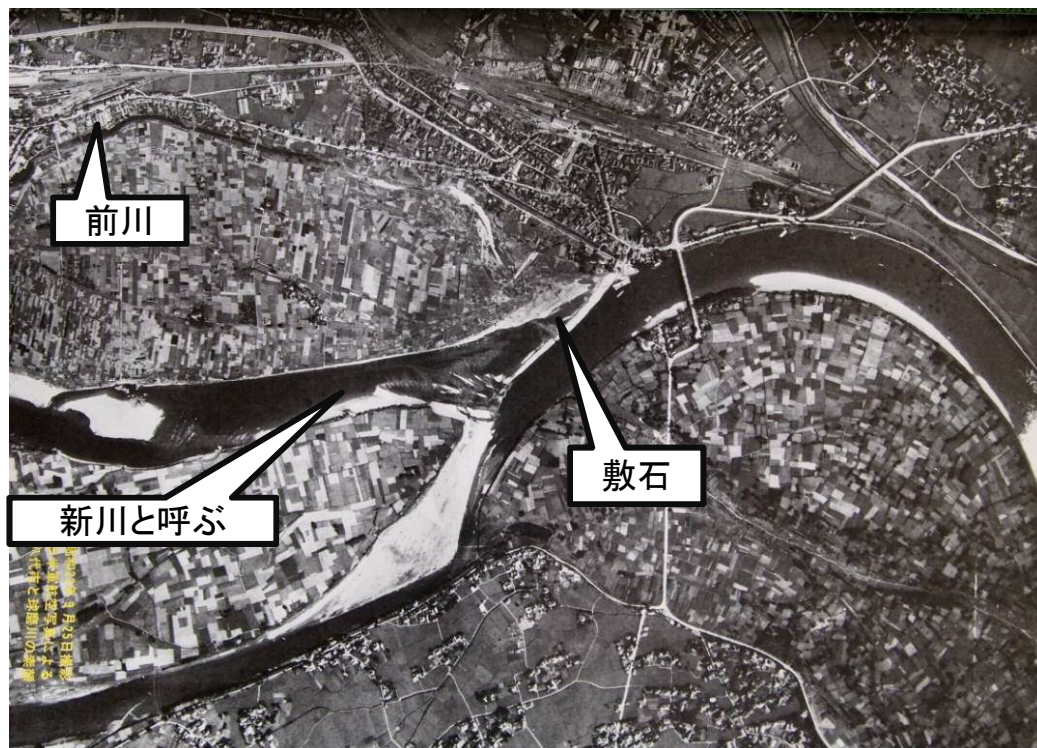
新川と敷石

細川三(さん)斎(さい)は八代城下町を繁栄させるために新川の開さくと敷石の建設を行った。新川は現在の長さ1500メートル、幅約100メートル、野上と麦島の間を貫流し、その上流は旧萩原番所（豊国旅館のあったところ）下で球磨川本流と分岐し、下流は紺屋町前面で前川に注いでいる。『八代市史』第4巻、蓑田田鶴男著の中には、「この川は水が割合に浅く、傾斜が急であるため、全体として浅瀬をなしていることが特徴である。これを新川というのは、細川三斎が八代在城14年間の遺業の一つで、入城第3年の寛永11年（1634）春、麦島三角州を開さくさせて作った運河だからで、340年前のことである。それまでは、野上と麦島の洲はひと続きの半島で、徳の渚を抱いていたのを、はじめ加藤正方が、はぜ塘下を掘って前川にし、今度三斎により野上・麦島の間を運河にして、徳の渚を新川……前川という、球磨川の支流にかえたのである。」と記されている。

新川は「舟筏の便を通ずる」目的でつくられ、中流の松求麻村（現坂本村）より木材・炭・薪・楮などを舟筏で運んでいた。毎年の洪水時に、前川堤は新川からくる奔流をまともに受け、前川の船着きは浅くなり堤防は危険なめにあった。このため藩主忠利は三斎の請いにより、大理石の石をもって新川の分岐点に一大石提を築いてこれをしめきった。これを「萩原の敷石」とよんでいる。敷き石堰は球磨川の流れを平常は新川をしめ切り、洪水時は越し水が前川に入る仕組みである。工事は百余日はかかったものと考えられる。

文政12年（1829）5月、松井(まつい)督(ただ)之(ゆき)のころに、この敷き石の中央から少し南よりのところ20メートルを切り開き、再び舟や筏を通すことにした。しかし昭和12年からの球磨川改修工事は閉める方向に進み、昭和40年6月中旬から7月3日にかけての豪雨で、球磨川は氾濫し、萩原敷き石上手の旧萩原番所跡石垣とその上の豊国旅館の流失などをみて、昭和42年に球磨川本流に球磨川堰、前川に新前川堰が新設された。

出典：球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



旧前川堰（萩原の敷石）

八代城下を洪水から防護するために、派川前川の分派口に設けられた分流規制堰であるが、同時にかんがい取水堰の効用を兼ね、前川の流入口付近に石灰石系の白石で築いた長さ120間（約218m）の固定堰で、その高さは当時平水面から6～7尺（1.8～2.1m）以上もあり前川には容易に水が落ちないようにされていました。下町は前川の右岸沿に発達しているので、洪水の流入を制御すると同時に前川河口の蛇籠港を維持するため土砂の流入を制御したものと考えられます。

■藩政時代の土木治水技術を考える

球磨川の本格的な土木普請は今から約400年前の藩政時代から行われており、加藤清正、加藤正方、細川三斎そして松井家により行われている。以下の絵図面は天保7年（1836年）に描かれたもので、松井督之の時代である。

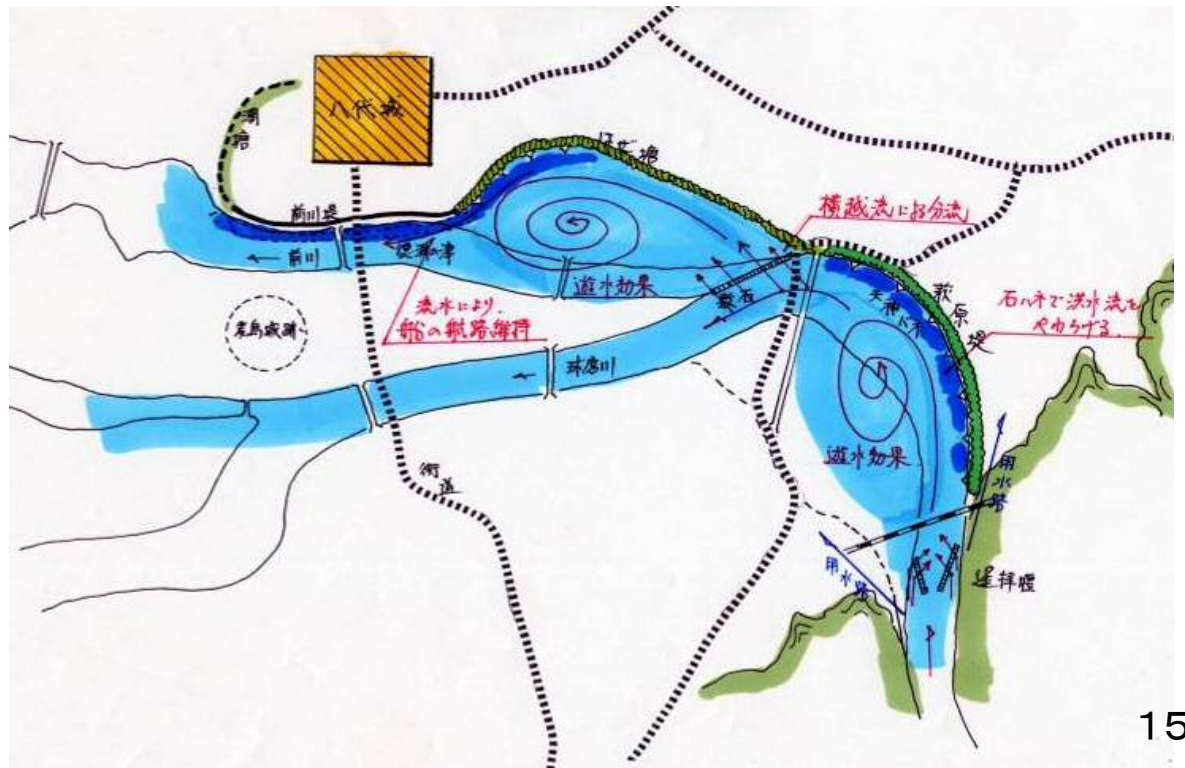
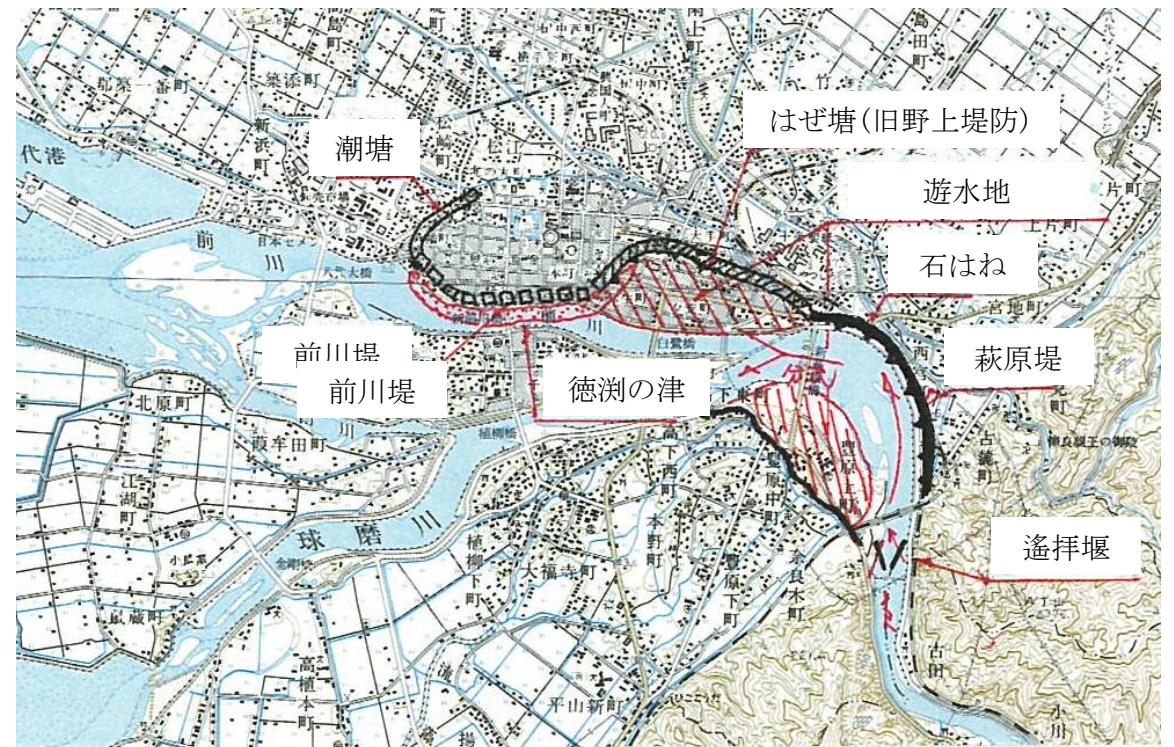


球磨川下流域の洪水防御のしくみ

- ①遙拝地点において、八の字の形をした遙拝堰により、平常時は左右岸へ用水の補給がなされ、堰中央部は舟運のため切り欠いている。
- ②八の字堰は床止機能を有し、洪水流を川の中心部に集め、流れの勢いを押さえ、萩原堤には石はねを設置し、この一帯を遊水地として利用している。
- ③その後、八代城下への洪水流を抑えるため、横越流方式による敷石（旧前川堰）による洪水分流がなされ、再び野上地区一帯は遊水地となる。
- ④溢れた流水は徳渕の津あたりで狭められた川幅により流速が増し、船の航路維持を図った。
- ⑤八代城下にとっては、前川、球磨川は城の外堀であり、島津藩に対する国防の要所であったようである。



はね石: 清正の巧みな治水技術として有名なはね石。清正は萩原堤の水衝部にこの石はねを設け、水の流れを流心に向かわせる工夫をした。

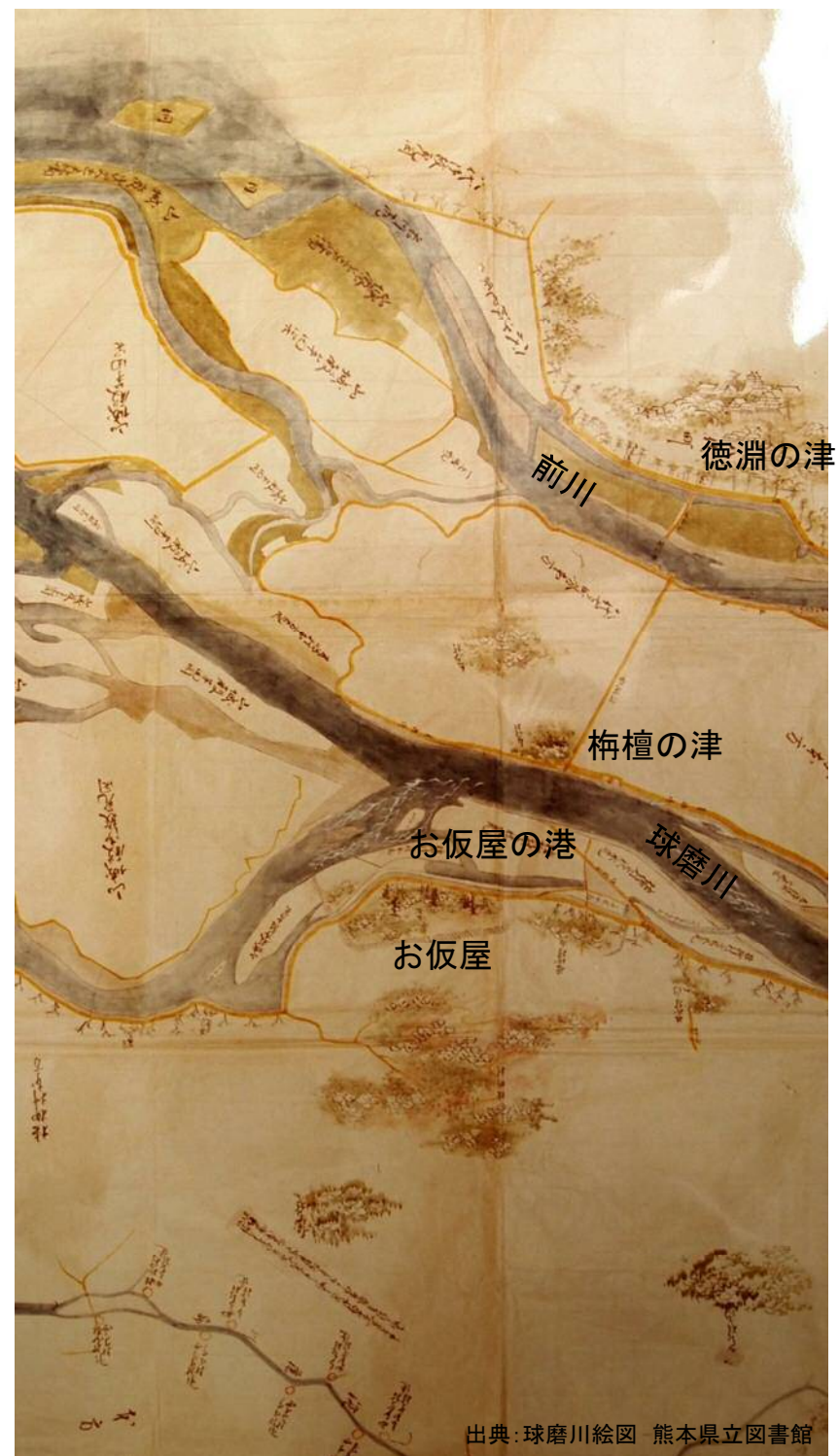


お仮屋(かりや)の港

植柳上町で南川分流点付近の左岸で明治の初めまで相良藩の御船蔵屋敷があったところである。元和6年（1620）加藤正方が麦島城が地震で崩壊したので、新城普請の良材木を相良長毎へ所望したことが『南藤(なんとう)蔓(まん)綿録(めんろく)』に記されている。長毎はその代償として芦北の田浦を要求し正方もこれを提供することになっていたが、この場所は不便のため寛永3年（1626）八代の球磨川河口に所換えとなった。これを御仮屋(おかりや)と呼び八代城主、加藤・細川・松井氏からの借地とされた。このため相良藩の交通・運輸・商業や文化交流の要衝でもあった。ここの管轄は人吉町奉行の所務となっており、八代御仮屋がその機能を発揮するのは寛永14年の島原の乱からである。『多田家文書』によれば、初代多田長左衛門長美は、寛永14年、35歳で相良家に召し抱えられお船手支配方に仰せつけられている。御仮屋の構成は番代（藩の役所）、船大工頭、鍛冶屋、船長楫取、水主、水土などであった。御船手組64戸、江戸末には120戸の屋敷小路をおいたところで、御船手とよばれた。

広さ1.2ヘクタールの敷地内に米や林産物を保存する蔵が5棟と寺社・役人・大工・鍛冶・船頭などの屋敷があった。任務としては、藩主の参勤交替や使者の公式旅者を運び、年貢米・特産物を大坂蔵屋敷への積み出し港として栄えた。この場所に664人の球磨の人たちが住み、川舟数十隻と御用船14艘を支配し、藩栄の港、回船問屋の性格をもって江戸末まで栄えた。今では船だまりや古い屋敷小路のあとが保存されていたが、近年円通庵も現在地へ移転した。明治維新により御仮屋も廃止され、126軒の内大部分は球磨郡に移住した。

出典：球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



梅檀の津（せんだんのつ）

天正16年（1588）八代地方は小西氏支配地となり、小西美作（みまさか）行（ゆき）重（しげ）（もと木戸作右衛門）が古麓城代となったが、のちに古麓城の西1里ばかりの麦島村に平城を築いた。麦島城は大坂城を模式城とし、三層三重の天守閣がそびえ、麦島城の海港として梅檀（せんだん）の津を設け、北に徳の渚をひかえ海上交通の要所とした。麦島城のころは梅檀の津を正港とし朱印船貿易の根拠地とした。天保15年（1844）、高田手永略年鑑に対岸植柳村への球磨川舟渡しは梅檀（せんだん）ノ渡（わたし）とよんでいる。

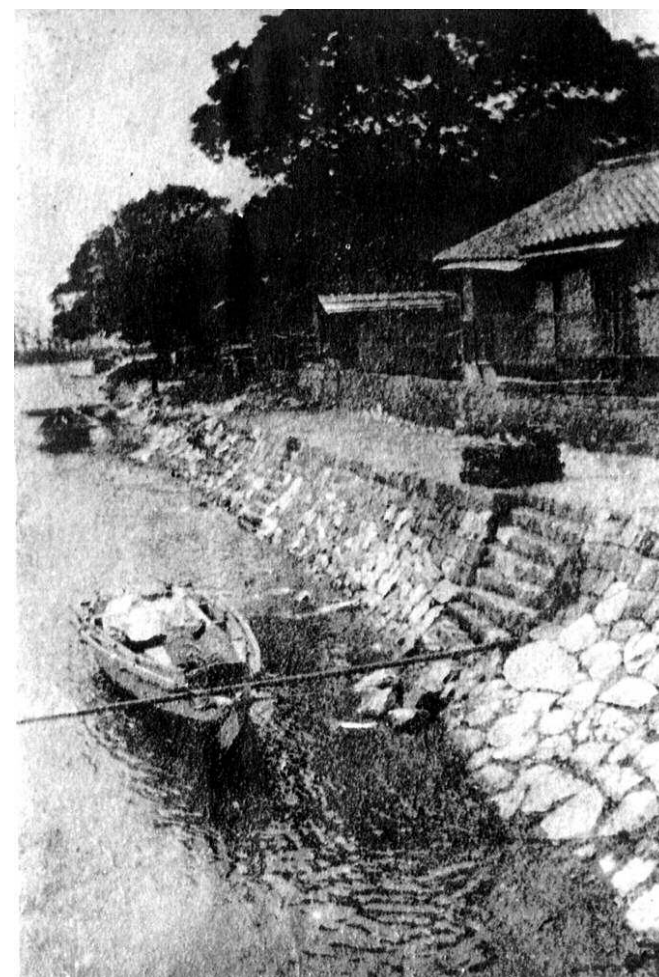


昭和25年4月 右岸梅檀量水標より下流を望む

徳渚の津（とくぶちのつ）

古代から近世にかけての港として発展し大陸貿易の拠点となっていた。紺屋町から住吉神社の間が港の中心で、川口には中洲が形成されていた。『小早川文書』によれば、平安初期に宗重が徳渚にあった正倉院の長をしていたことが記されている。永享7年（1435）名和教信が朝鮮遣使として徳渚を出発しており、長禄3年（1459）教信が朝鮮遣使を送っている。『海東諸国記』には、「教信、巳卯の年、使をつかわして来朝す。書に肥後州八代源朝臣と称する。歳に一船をつかわすことを約す」と記されている。『求麻外史』には、相良義滋、上村兵庫長種に命じて中島館を建て海外貿易の拠点とすると記されているのが天文2年（1533）のことである。天文4年（1535）12月13日、菊池義宗（義武）、高来（長崎県）から船で徳渚に上陸、蓑田信濃守が義滋の使として迎えて翌5年2月徳の渚から船で帰っている。また6月15日再び来代、義滋と漁撈を見物した。

天文8年（1539）3月晦、義武は建造中の渡明船市来丸が進水したのを眺め、中島館を宿舎とした。当時、中島村は相良氏家臣の屋敷が多く、徳の渚村は漁撈者や商工業者が多く住んでいた。松江村には百姓が多かった。天文9年（1540）8月11日、肥前大名、龍造寺隆秀は徳の渚に上陸し、日奈久温泉に浴して8月27日に帰っている。天文14年（1545）11月27日、勅使として大外記、大宮伊治とその案内者、大内義隆と弘田弾正忠ら一行の船が徳の渚から上陸し、義（よし）滋（しげ）が従五位下に叙し、宮内少輔に、世子為清も従五位下に叙せられ右兵衛佐に任じられる盛儀に出席、数日間には歓迎の催しがあり、12月14日に徳の渚より出帆した。



『球磨郡誌』によれば、海外貿易の例として琉球の円覚寺の全叢(そう)和尚書状に、砂糖百五十斤が相良長唯(ながただ)へ進献されていることが記されている。天文22年(1553)、八代から明へ掠奪船(倭寇)が出航した(『新熊本の歴史10、年表編』)。『嗣誠独集覧』の八代日記には天文23年(1554)3月、渡唐船市来丸が揚子江口まで出たことが記され、弘治元年(1555)4月11日、難風を受けて揚子江河口で渡唐船が覆没した。その覆没船18隻の中には16隻が八代船であった。当時、徳湊港は海外貿易の拠点として知られていた。天正15年(1587)、秀吉が島津征伐の途、古麓城に在城した折、ガスパル、コエリヨ(司祭、副管長)とともにフロイス等が口之津港よりこの徳湊の津へ来港している。

徳湊港は江戸時代、加藤・細川・松井氏の港として発展し、元和8年(1622)石段などが築かれ港も整備された。港には船の泊所と荷揚げ場に白島の大理石が利用され、船着き場への坂道や石段も大理石が利用された。荷揚げ場上には、石の「はね」がつくられ船着きに十分工夫された。また番所がおかれ、浜お蔵や松井家御用船の格納庫(御船場)、加子町(83軒)、造船所、修理をする船大工町ができ松井氏御用船の荷船専用港として発展した。

出典: 球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



八代絵図(県立図書館)



大理石による石段



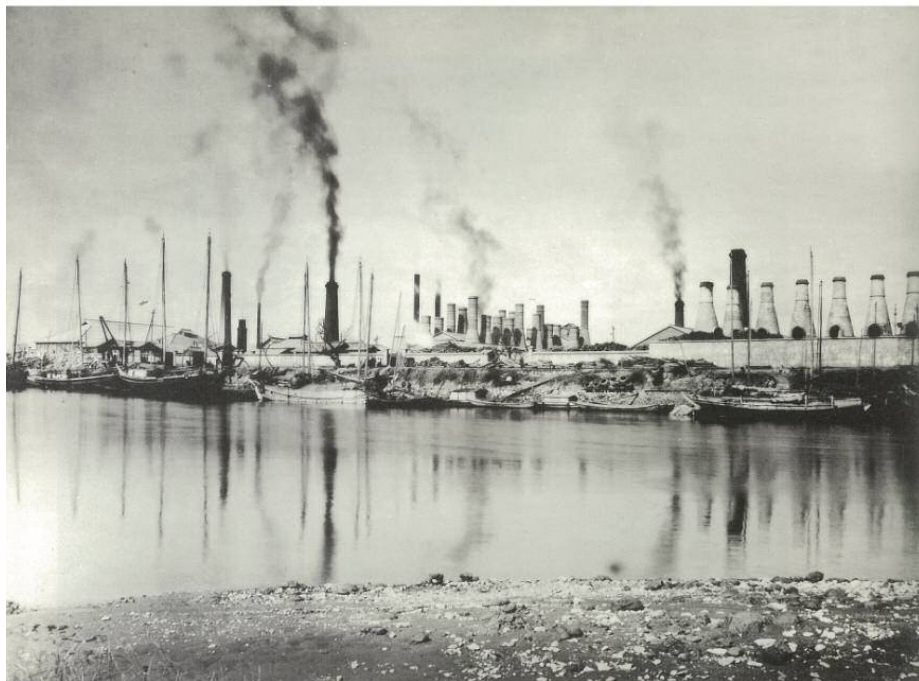
現在でも堤防裏には石垣が残っている。

蛇籠港（じゃかごこう）

八代港内港の完成以前の港が蛇籠港で八代城主松井氏によって築港されたものである。明治元年（1863）、江戸時代の徳洲港の土砂の堆積によって埋もり船の運航に支障をきたすようになり、水深1.5メートル、長さ86メートルの物揚場が修築されて物資の輸送、天草方面への交通の要地となった。この港は竹で編んだ一間四方の籠に栗石を入れて蛇の鱗形に並べたところから、いつのまにか蛇籠港と呼ばれるようになった。

沿岸には、明治23年に日本セメント八代工場、大正11年に城南鉄工所、昭和12年昭和農産酒造（現メルシャン八代工場）などができた。昭和28年頃になると船舶の運行が新内港へと移行し、蛇籠港は静かな漁港となった。昭和38年5月まで天草・三角・雲仙を結ぶ旅客船発着港として活動し、同39年には内港に八代港管理事務所も開所した。

出典：球磨川教材化資料集（第二集）ふるさと八代球磨川



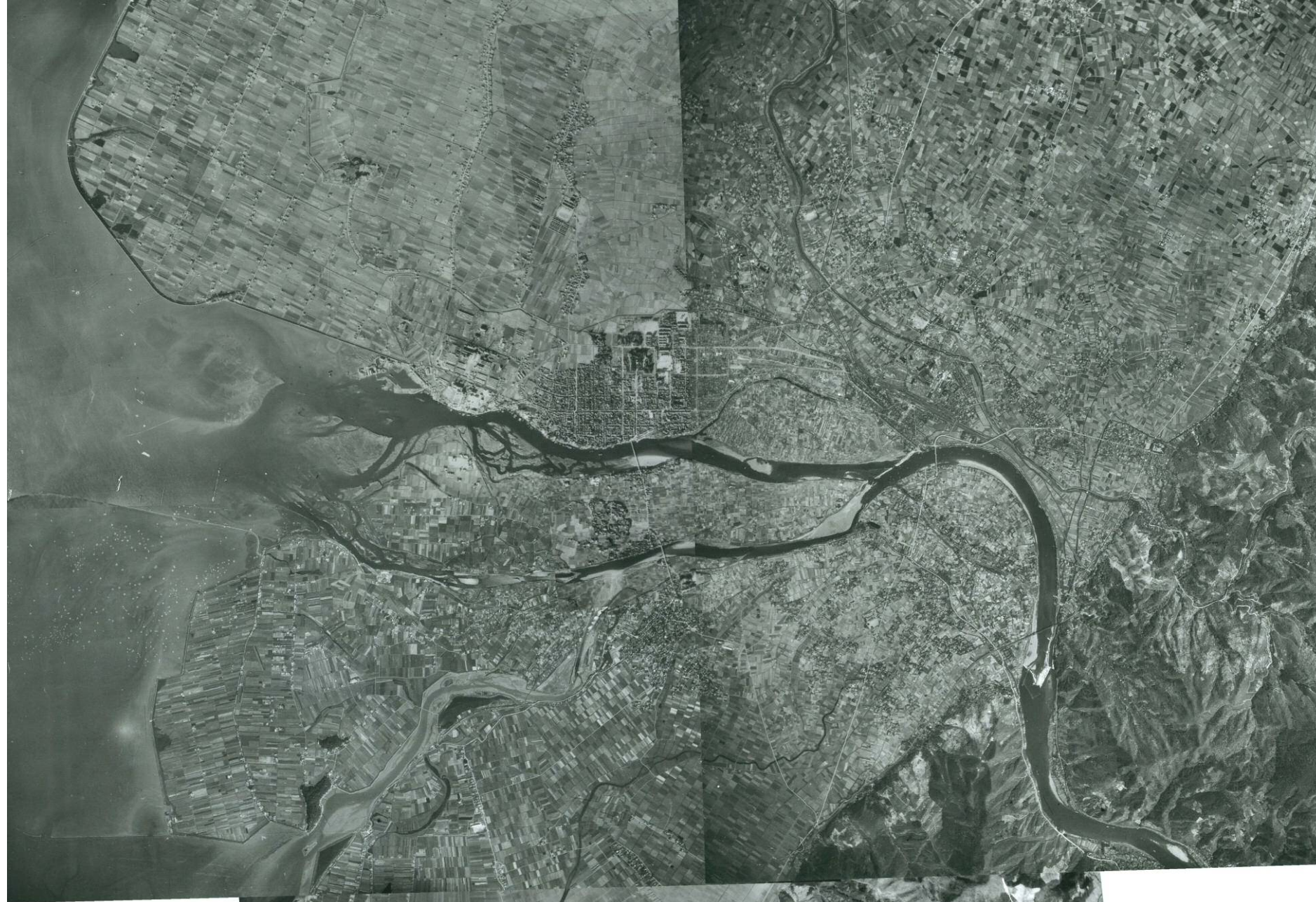
明治22年の日本セメント八代工場



船出浮：蛇籠港より出港



繁栄した蛇籠港の様子



球磨川下流域航空写真
昭和23年撮影